

ふち けい
不活の柄
けいおん
川海宵



SF
短編

その少年は、地下にある私の病院にやってきた。

彼は診察室に入ってくるなり、透き通るような白い体をあらわにし、一生懸命、自分の症状を訴えてきた。

「先生、助けてください。突然、皮がボロボロと剥がれてきたんです。気持ち悪くて仕方ありません。何とかしてください！」

私は少年の体を観察しながらいった。

「発育途中に見られる代謝不全でしょう。成長とともによくなるケースがほとんどです。そう心配することはないでしょう」

「でも……ここまでひどくなるものですか？」

少年は納得できないといったようすで、私のほうに背中をむけてきた。なるほど日焼けで皮がめくれるといったレベルを通りこし、彼の背中は大きく縦に裂けかけていた。

「痛いですか？」

「……いえ」

「では、塗り薬を渡しますから、それを塗って経過をみてください。大丈夫、よくなりますよ」

私はつとめて冷静に言い、少年の不安を少しでも拭えるよう優しく笑ってみせた。

それからしばらく、少年は病院に来なかった。

＊

「先生、なんとかしてください！ また皮が剥がれてきました」

少し成長した少年が、悲鳴のような声をあげ、診察室に入ってきた。

「成長したら、治ると言っていたじゃないですか！」

「よくなるケースがほとんどだとは言いましたが、治るとは言ってません。きちんと通院して、治療を行わないと――」

「先生の言いたいことはわかりましたから、またあの塗り薬を出してください」

私のありがたい話を制止し、少年は自分の要求を伝えてきた。やれやれ、これだから今の若い子は……。

私は同じ薬を出すかわりに、一つ約束をさせた。

「いいですか、薬を塗って治ったようにみえても、いいというまでは病院に通ってください。わかりましたね？」

「わかりました。わかりました」

少年は二つ返事でうなずいていたが、その日から、またしばらく、病院に来なくなった。

＊

「先生、ぼくはもうダメです」

少年は泣きそうな顔で診察室にやってきた。随分、遅しく成長していたが、顔色は黄色かった。

「また、皮が剥がれてきました」

「うーむ……」

私は思わず唸った。ある病名が脳裡をよぎった。

「先生、ぼくはなにかとんでもない病気にかかっているんでしょうか？」

私は迷った挙句、可能性の一つを口にした。

「……溶解性細胞疾患の疑いがあります」

「ようかいせいさいぼう……なんですかそれは？」

「細胞がドロドロに溶ける病気です……落ち着いてください、まだ疑いがあるだけで、そうと決まったわけじゃありません。きちんと検査をしましょう」

少年は説明の途中で泣き出していた。細胞がドロドロに溶けて無事なはずがない。彼は死を予感し震えだした。

私は彼の手を強く握り、落ち着かせた。

「とにかく入院の必要があります。すぐに手続きをしましょう。できるだけことはします。一緒に治療の道を考えましょう」

少年は無言でうなずいた。

*

検査の結果、少年はまぎれもなく溶解性細胞疾患だった。私は進行を遅らせるため、ありとあらゆる手段を尽くしたが、結果は思わしくなかった。溶解性細胞疾患はいまの医学ではどうすることもできない不治の病だった。

ベッドに横たわる少年は、私にむかって力なく笑いかけた。

「先生、ありがとうございます。ぼくは先生に診てもらえて幸せでした……」

「いまお礼を言うのはおかしいですよ。まだ治療は終わってませんから……大丈夫、きみは必ず、元気な体でこの病院から退院できます」

少年は静かに首をふった。

「先生、ぼくはあとどれくらい生きられますか？」

あまりに直接的な質問に、私は思わず少年から視線をそらした。

「教えてください。お願いします！」

少年の体はいまや茶色い繭のようなもので覆われ、徐々に溶解が始まっていた。額には大きな角のような突起物までできている。こうなってはもうどうすることもできなかった。

少年の懇願に、私は躊躇った。躊躇ったすえに口を開いた。

「……もってあとふた月でしょう」

「ありがとう、先生」

少年はとても穏やかな顔でそういった。すべてを覚悟した顔だった。

*

数週間後、少年の退院が決まった。

細胞がドロドロに溶けた少年は、――その後、立派なカブトムシ（！）に生まれ変わっていた

。

「入院生活がうそのようです。先生、力がみなぎって仕方ありません」

「それは一時的なものです。自宅療養中は無理をしてはいけませんよ」

「はい！」

彼は力一杯握手をしてきた。腕がつぶれるくらいの力に私は顔をしかめた。

彼は“羽化（うか）”を経て、一時的に気力、体力が充実する時期を迎えていた。私は彼に自宅療養の話を持ちかけ、最期の時間を自由に過ごすようすすめた。黒光りする彼は喜んでその提案を受け入れた。

自宅療養中は安静にするよう念を押したが、彼のことだから空を飛びまわり、青春を謳歌するに違いない。

余命ひと月。それもいいだろう。

私は玄関で彼を見送ったあと、いまだ“蛹化（ようか）”の訪れない、白くてもこもこの自分自身をあらためて眺めた。

一瞬、私のほうが病人に見えた。

不治の病

<http://p.booklog.jp/book/58873>

著者：八海宵一

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yaumiyoiti/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58873>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58873>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ